大 学 史 研 究 通 信

第 112 号　2025 年 7 月 5 日（土）

大学史研究会

第 112 号の内容：会員情報・新入会員 自己紹介、2025 年度 大学史研究会イベント開催報告（6 月 15 日）、2025 年度臨時総会報告（6 月 15 日）、2025 年度第 48 回大学史研究セミナーについて、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、2025 年度会費納入のお願い、会員による訪問記、図書紹介、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

会員情報

新入会員（順不同）

上原　雄大　会員
（所属：京都大学大学院・院生）

河村　俊太郎　会員
（所属：東京大学）

山口　真穂　会員
（所属：元早稲田大学・院生／NPO 法人内村鑑三記念今井館教友会）

新入会員 自己紹介

上原　雄大　会員

はじめまして。京大工学研究科の修士 1 年の上原と申します。現在は、構造学の研究室に所属していますが、学部時代は建築史学のゼミに所属し、近代大学の寄宿舎に関する研究をしていました。その研究成果を発表し、教育史学全体に新たな知見を提供するとともに、教育学の研究者のみなさんと議論したり意見を頂戴することで、自分の分野の研究をさらに深めたいと思い、この研究会に入会しました。これまで、ゼミでは建築史学（近世・古代の寺社仏閣など・・・）の研究をする教授・学生としか議論ができていなかったので、教育史学の研究者のみなさんと議論できることがとても楽しみです。どうぞ、よろしくお願いいたします。

河村　俊太郎　会員

はじめまして、東京大学大学院教育学研究科の河村俊太郎と申します。これまで図書館情報学という領域を主なフィールドとし、東京（帝国）大学の図書館史について研究してきました。大学図書館の蔵書や分類が、その大学の研究や教育といった学問の展開とどのように関わっているのか、文学部や工学部などの部局の図書館を中心に検討を続けています。会員の皆様との交流を通じて、さまざまな学びが得られればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

山口　真穂　会員

近代日本の大学における障害学生支援に関心があり、戦前の早稲田大学による視覚障害学生への講義録の刊行とその歴史を学士・修士論文で扱いました。修士課程で早稲田大学 150 年史編纂のアルバイトを経て、現在は無教会の資料館で矢内原忠雄の東大関係史料を整理しています。1950 年代東大の発達障害学生支援室立ち上げに今は興味があります。まだまだ勉強中の身ですが、よろしくお願いいたします。

（会員情報担当：原圭寛）

2025 年度 大学史研究会イベント開催報告（6 月 15 日）

会員間の交流を図ることを目的に、2025 年 6 月 15 日（日）13-17 時に大学史研究者交流会を東京大学教育学部 1 階 158 教室で開催しました(対面とオンラインとのハイブリッド形式)。当初運営員会では一体何名の会員に参加してもらえるだろうかと思っていたのですが、おかげさまで当日は 41 名（非会員 13 名も含む）の方にご参加いただき、予定時間（4 時間）があっという間に過ぎてしまいました。

当日はそれぞれの研究関心をウェブ上のドキュメントで共有し、それに基づいて発表・質疑応答するという形式でしたが、発表者それぞれの研究関心や「大学史研究に対する想い」をめぐって、建設的な交流ができたように思います。また大学史研究会会員の研究関心が、きわめて広範であること、それゆえに大学史研究が持つ可能性を再認識する機会にもなったのではと考えた次第です。今回は建築の観点からのご発表も多く、参加者は興味深く聞き入っていたように思います。臨時総会後に実施した懇親会でも、大学史研究の今後に向けて、会員・非会員の間で活発な交流がなされました。

大学史研究会では年 1 度開催している大学史研究セミナーがメインイベントとなりますが、今後も書評会や『大学史研究』掲載論文の合評会などさまざまなイベントを実施していきたいと考えています。今後とも大学史研究会の活動の充実にご協力賜りますようお願い申し上げます。

（セミナー担当：戸村理）

〔大学史交流会イベントの様子　東京大学本郷キャンパス教育学部 158 教室〕

2025 年度臨時総会報告（6 月 15 日）

2025 年 6 月 15 日（日）、下記の通り、2025 年度大学史研究会臨時総会（議長：蝶事務局長（運営委員））が開催されました。対面とオンライン会議システムを併用する開催形態で行い、会員の皆様がご参加しやすいようにご案内させていただき、実施致しました。

以下、審議事項、報告事項について概略を報告致します。

日時：2025 年 6 月 15 日（日）17:10～18:15
場所：東京大学本郷キャンパス教育学部 158 教室とオンライン会議システム（Zoom）
参加者：会員のみ（対面、オンライン）

《審議事項》

１．会費の改訂について

福留運営委員会代表より、会費の改訂について大学史研究会の財政状況、紀要『大学史研究』の刊行に要する費用、日本学術会議協力学術研究団体への加盟申請等の状況、シミュレーションの結果等が共有され、説明、提案された。附帯事項として、安定的な身分が無い（常勤職にない）会員についての会費については運営委員会で継続的に検討していくことも説明され、以上承認された。

２．「終身会員」（案）の追加について

大学史研究会会則改訂案の資料に基づき、原運営委員（会計情報担当）より、「終身会員」（案）について、説明、提案され、承認された。

３．『大学史研究』の投稿・編集の基本方針の一部改訂について

中村運営委員（紀要編集委員長）より、『大学史研究』の投稿・編集の基本方針の一部改訂について提案され、「申し込み締め切りは 2 月末日、投稿締め切りは 4 月末日」とすることが承認された。2026（令和 8 年）年 12 月刊行予定の『大学史研究』（第 35 号）より適用される。承認された。

４．大学史研究会会則の一部改正等について

大学史研究会会則改訂案の資料に基づき、原運営委員（会計情報担当）より、特に機関会員の詳細について説明、提案され、承認された。

５．その他

特になし。

なお議事進行については、審議事項３．⇒１．⇒２．⇒４．の順で審議、承認された。

《報告事項》

１．運営委員会・事務局活動報告について

蝶事務局長より 2024 年 12 月開催の総会から今回の 2025 年度臨時総会のまでの運営委員会・事務局を中心とした活動報告について情報共有された。

２．会費の納入について

蝶事務局長より今年度の会費の納入についてお願いがなされた。

３．イベントの充実について

戸村運営委員（セミナー担当）より今後の大学史イベントについて説明された。また、オンラインでの形態によるイベント等の実施も工夫していくことが提案された。

４．その他

特になし。

（事務局長：蝶慎一）

2025 年度第 48 回大学史研究セミナーについて

2025 年度の大学史研究セミナーは、2025 年 12 月 6 日（土）、7 日（日）の日程で、日本大学文理学部キャンパスオーバルホールで開催いたします。例年通り初日午後にはシンポジウムを、2 日目は午前 9 時から自由研究報告を行います。シンポジウムについては現在準備中

です。決定次第、研究会ウェブサイトでご連絡いたします。
シンポジウム以外の開催概要は以下のとおりです。

日時　2025年12月6日（土）13:00〜18:00　シンポジウム・総会
7日（日）9:00〜13:00　自由研究発表
＊両日ともに終了時間に変更の可能性があります。ただし2日目は最大で17時までとなります。
場所　日本大学文理学部キャンパス オーバル・ホール
（東京都世田谷区桜上水3-25-40）
開催方法　対面
参加費　通常会員・学生会員：無料
非会員（有職者）：2,000円
非会員（非有職者・学生）及び機関会員所属者：1,000円
申込方法　当研究会ウェブサイトにて受付（後日、参加申込用URLを公開）
申込期間　2025年11月1日（土）〜2025年11月25日（火）（予定）

自由研究発表者募集
発表時間　お一人あたり45分（発表30分＋質疑応答15分）
＊発表者多数の場合は、発表時間等の調整をさせていただく場合があります。その場合はあらかじめ自由研究発表申込者にご連絡いたします。
発表資格　年度会費を納入済みの会員
申込方法　当研究会ウェブサイトにて受付（後日、参加申込用URLを公開）
申込期間　2025年9月16日（火）〜2025年10月5日（日）（予定）

（セミナー担当：戸村理）

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

紀要『大学史研究』第34号は、2025年12月刊行をめざし、現在、編集委員の総力をあげて作業を進めています。
6月の臨時総会でお知らせしましたように、2026年刊行第35号より編集スケジュールを下記のとおり変更することとなりました。
投稿申込　旧　3月30日　⇒　新　2月末日
投稿締切　旧　6月30日　⇒　新　4月30日
期首と重複し皆様方にはご迷惑をおかけするかもしれませんが、査読・再投稿までの日程に余裕を持たせつつ、年内に確実に刊行するための変更ですので、ご理解・ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（紀要編集委員長：中村勝美）

2025年度会費納入のお願い

今年度の年会費納入についてお願いのご連絡を申し上げます。大学史研究会の実収入は、会員各位からの年会費に大きくよっております。会員の皆様の円滑な研究会運営へのご協力に感謝を申し上げます。2025年度までの年会費は 5,000 円です。なお、大学院等在学あるいは日本学術振興会特別研究員の各位には、「学生会員」として 年会費3,000 円が適用されております。年会費を3ヶ年度分以上滞納されている会員には、研究会の継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまでは、大学史研究会からの諸連絡、『大学史研究通信』、『大学史研究』（紀要）等の発送の停止が決定しております。
なお、大学史研究会の会計年度は9月末日が締め日となっており、昨年10月1日より「2025

年度」の取扱いとなっております。未納分のある会員の皆様には、本年 5 月上旬にゆうちょ銀行の払込取扱票を送付しておりますのでご確認ください。

また、2025 年 6 月 15 日（日）に開催された臨時総会におきまして、2026 年度（2025 年 10 月 1 日～）以降の年会費が通常会員 10,000 円、機関会員 5,000 円、学生会員 4,000 円に改訂されました。なお、機関会員となっている各機関にご所属の皆様におかれましては、セミナーでの個人研究発表及び紀要への投稿論文を希望する場合、通常会員としての登録及び会費納入が必須となりますのでご注意ください。

引き続き、大学史研究会の発展と円滑な運営のため、会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げる次第です。

――年会費振込先――

ゆうちょ銀行振替口座 00120-3-47583

［他行からゆうちょ銀行への振込口座番号：〇一九店（店番 019）当座 0047583］

または

三井住友銀行 池袋東口支店（店番 671）普通 3456109

（会計情報担当：原圭寛）

会員による訪問記

国立文書館（The National Archives）訪問記 ― イギリスの記録保存の中心を歩く

中村　勝美（広島女学院大学）

ロンドン南西部リッチモンドに位置する国立文書館（The National Archives：TNA）は、イギリス政府の記録管理と公文書保存の中枢である。かつて Public Record Office（PRO）として知られていたこの施設は、2003 年以降、王立歴史文書委員会（Royal Commission on Historical Manuscripts）、政府刊行物出版局（Her［His］Majesty’s Stationary Office：HMSO）等を改組・統合し、現在の体制となった。その使命は、公式サイトの言葉を借りれば、「シェイクスピアの遺言書からダウニング街のツイートに至るまで政府の記録を収集し、将来にわたって守り、広く誰にでもアクセス可能にすること」にある。イギリス政府文書を中心とした所蔵資料は 1000 年を超える歴史を持ち、枢密院文書をはじめとする大学認可関連資料など、教育史・大学史研究者にとってもきわめて貴重な資料の宝庫である。

アクセスは良好で、ロンドン中心部から地下鉄 District Line で「Kew Gardens」駅下車、徒歩およそ 10 分で到着する。私が初めてここを訪れたのは、大学院生時代、今から 30 年近く前のことである。当時、「近代史セミナー」の一環として、貸切バスで見学に行った。無機質で巨大な建物を見た学生の一人が、思わず“Looks like TESCO！”とつぶやいたことが懐かしく思い出される。TESCO とは、郊外型スーパーマーケットの名称である。そのときはカタログ検索の不便さ、都心からのアクセスの悪さといった印象が重なり、その後長らく足が遠のいていた。

国立文書館の入口
噴水があり、大きな水鳥が悠然と歩いている
乗り換え検索だけでなく、地図アプリとしても優秀な“Citymapper”があれば、駅から歩いて誰でも辿り着ける

2025 年 3 月、久々に足を運んでみると、施設の外観はかつてより風格を増し、受付システムのデジタル化など時代の変化を感じた。ちょうど“MI5: Official Secrets”という企画展が準備中で、第二次世界大戦の防諜活動や二重スパイ、冷戦時代の記録を紹介する初の試みだという。残念ながら公開は 4 月以降とのことであった。

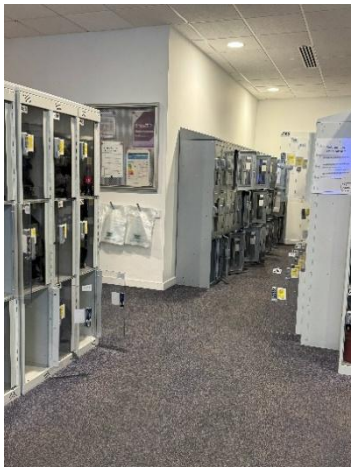
資料閲覧には、事前予約が必須である。TNA のオンラインカタログ“Discovery”で検索し、訪問日に合わせて資料請求を行う。1 度に予約できる資料は 1 日につき 12 件で、海外から訪問する研究者にはやや物足りないかもしれない。同一の請求番号から始まるシリーズ内に限定されるものの 20〜40 件まで予約ができる特別席も用意されているが、早期に埋まってしまうようである。

初めて訪れる際は利用者登録が必要である。事前にオンラインで仮番号を取得したのち、資料を予約する。現地で身分証明となる公的書類を提示し、写真撮影をすれば利用登録証が即日発行される仕組みである。

ここで気になるのが、どのような「公的書類」を用意すればよいかである。登録には「現住所」が書かれた公的書類が必要で、提出可能な書類は公共料金の請求書から銃所持許可証まで幅広い。しかし、日本人の多くが最初に思いつく「パスポート」については、Passport (with an address entered by the issuing authority) とわざわざ書いてある。

ご存じのように日本のパスポート住所欄は「所持人記入欄」であり、最近は欄そのものが廃止されたと聞く。そのため、運転免許証やマイナンバーカードなど、住所が記載された本人確認書類を持参し、英訳しておけば安心である。私は運転免許証とその英訳を提出したが、「自家製翻訳」でもまったく怪しまれることはなかった。

利用登録証が発行されたら、クロークで手荷物をロッカーに預ける。ノートパソコン等必要なものは備え付けの透明のビニール袋に入れる。閲覧室の入口では手荷物検査がある。検査はかなり細かく、ペンだけでなく定規も持ち込み禁止で、帰る際にはノートの頁を一枚一枚めくって何か挟まってないか確認された。



クロークルームのロッカー、電子錠がついている
若い頃、香港にいたというボランティアスタッフが手取り足取り、使い方を教えてくれた

無事、閲覧室に入ったら、奥のデスクで請求した資料を受け取る。机は広くて、電源も豊富にあり、筆写・写真撮影ともに許可されている。請求番号、資料返却日等が記載された黄色いタグも付されているので、撮影の際には大変便利である。もちろん、一日で閲覧しきれなかった資料は、帰る際に「キープします」と伝えれば別日でも閲覧することができる。

館内のカフェは地元の老舗 Maids of Honour が運営しており、温かいランチを 6.5 ポンドで提供している。これは食費の高いロンドンと比べ破格の設定である。印象的だったのは、公共施設の売店ではペットボトルをほぼ見かけないことである。ここでは、給水スポットが整備されており、マイボトルを持参すれば自由に給水できる配慮がなされていた。

この日の「本日のランチ」はフィッシュ＆チップス（サラダを追加したので 7.5 ポンド）特製のタルトがおすすめらしい

訪問者の楽しみの一つであるギフトショップ
ロゴ入りトートバッグなどアーカイブのオリジナルグッズが並ぶなか、以前、訪問した際、記念に購入した“Ruler”という名の物差し（歴代国王の在位年が書いてある）が今も健在であることを発見、宮島のしゃもじ的な定番土産なのだろうか？

今回のお土産は「サー・ヘンリー・コールのネズミ」
19 世紀初頭イギリス政府の記録が劣悪な環境で保管されていたことを象徴するネズミのミイラ（のぬいぐるみ）
公文書整理に携わっていたコールが、議会で証拠として提出し PRO が創設されるきっかけとなった
コールは後のヴィクトリア・アルバート博物館初代館長、ネズミは現在も文書館に保存されており、記録保存の重要性を伝える歴史的な遺物となっている
イギリスの人はミイラ好きである

カタログからおおよその推測はできるものの、一つの請求番号で一箱分の資料が出てくることもあれば、1 点ずつ分類され番号が付けられている場合もある。資料請求は一日 12 点に限られているため、想定より早く調査が終わることもある。そのようなときは、近くのキューガーデンを散策したり、リッチモンドの街まで足を延ばしたりするのもおすすめである。

リッチモンド・グリーンに面したパブ　“The Prince’s Head”
創業 300 年、時代を超えて愛されてきたが、ドラマ「テッド・ラッソ」の撮影で一躍有名になった
リッチモンドからは South Western Railway でロンドン・ウォータールー駅に出られる
テムズ川を眺めながらの移動は、地下鉄とは異なる趣きがある

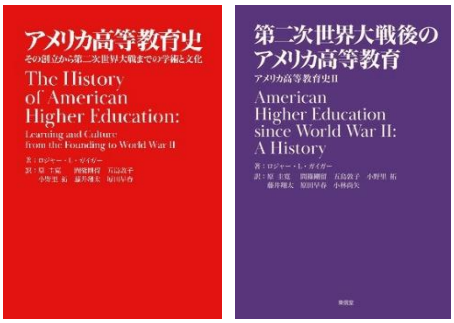
国立文書館はたんなる資料保存・提供の場ではなく、制度の裏側を記録する知の基盤である。大学制度の形成と変容、国家と大学との関係を具体的に追跡するには欠かせない拠点であり、静謐でゆったりとした空間は、研究者にとって知的刺激と発見に満ちている。30 年の時を経て、記録と記憶のあいだを再び歩くことができたことに、静かな感慨を覚える訪問であった。

図書紹介

原圭寛（昭和音楽大学）
間篠剛留（日本大学）
五島敦子（南山大学）
小林尚矢（東京大学・院生）

ロジャー・L・ガイガー著、
原圭寛、間篠剛留、五島敦子、小野里拓、
藤井翔太、原田早春訳
『アメリカ高等教育史：
　その創立から第二次世界大戦までの学術と文化』
東信堂、2023 年

ロジャー・L・ガイガー著
原圭寛、間篠剛留、五島敦子、小野里拓、
藤井翔太、原田早春、小林尚矢訳
『第二次世界大戦後のアメリカ高等教育：
　アメリカ高等教育史 II』
東信堂、2025 年



ペンシルベニア州立大学名誉卓越教授のロジャー・L・ガイガーが 2 冊にわたるアメリカ高等教育史通史、*The History of American Higher Education : Learning and Culture from the Founding to World War II*（Princeton UP, 2014: 以下「I 巻」）と *American Higher Education since World War II: A History*（Princeton UP, 2019: 以下「II 巻」）を刊行した。これらはアメリカ高等教育史研究における「リビジョニズム」と呼ばれる世代の研究者たちによる最新の研究動向をまとめるのみならず、これをガイガー独自の時代区分である「10 の世代」論を基に配置し、更にいくつかの重要な箇所についてはガイガー自身が一次資料を基に論じている。その成果は、各種書評等において一部批判はあるものの、概ね高く評価されており、「リビジョニズムのひとつの到達点」といった声も聞かれる。
今回はこの 2 冊を、本会会員 4 名を含むグループが翻訳・刊行を行った。アメリカ高等教育史の通史は、2003 年にフレデリック・ルドルフの『アメリカ大学史』が刊行されて以来 20 年ぶりとなるが、原著の刊行 1962 年であることを考えると、研究水準としては 50 年分

以上の開きがあったことになる。本訳書が今後アメリカ高等教育史を研究し始める日本の研究者にとって、この開きを埋める一助となれば幸いである。

以下、翻訳に携わった本会会員の4名による、各担当パートについてのコメントを掲載する。

原圭寛（昭和音楽大学、I巻5章・6章・12章他、II巻3章・8章他担当）

ここでは原の担当箇所のうち、I巻第5章「カレッジ・ルネサンス、1820-1840」と第6章「地域間の相違と科学の進展他、1840-1860」、II巻第3章「大学の権勢」と第8章「21世紀のアメリカ高等教育」について紹介する。いずれの箇所においても、カレッジ及び大学と社会の関係について、I巻第5章・第6章では学士課程教育を通して、II巻第3章では学術研究を通して論じられている。これらの章を対比させると、第二次世界大戦の前後でアメリカの高等教育の中心が教育から研究へと移っていったことが鮮明になるが、重要なことは、必ずしもアメリカ高等教育が戦前のカレッジにおける教育機能を（一時的におろそかにすることはあったにせよ）失ったわけではなく、むしろ大学院へと向かう教育段階の前段として重視され、強化されてきたということである。しかしII巻第8章ではこのカレッジにおける学生の学びが、21世紀においては「難問」として再び検討の対象となりつつあることが示されており、そこには日本の高等教育が抱える問題点と（程度差はあるものの）共通することも多い。

間篠剛留（日本大学、I巻8章・9章、II巻2章担当）

間篠が担当したI巻第8章・第9章（19世紀後半から20世紀初頭）とⅡ巻第2章（1950年代）は、いずれもアメリカ高等教育の拡大期であった。前者では、ドイツの大学モデルを参考に研究と専門ディシプリンを中心とする制度が形成されるとともに、専門職教育や大学院教育の整備が進み、リベラル・エデュケイションも変容していった。後者では、冷戦下の緊張と経済繁栄、アメリカ的生活様式の浸透を背景に、多様な学生層を受け入れるようになったが、様々な矛盾も顕在化した。一見すると、前者は学問追究を中心とした理念形成の時代、後者はそれが後退した時代と映る。しかし、前者の諸改革も、産業化や専門職需要、財団の影響といった、社会的に評価されるものに応答したものだった。もちろん、一方的に規定されていたわけではなく、その像を作り替えていこうともしていた。高等教育は純粋な知の場ではなく、社会の構造や価値観に応答し、しなやかで強かな適応を重ねてきた。拡大に潜む強かな営みは、大学に関わる者にとって、非常に興味深い。

五島敦子（南山大学、I巻10章・11章、II巻1章担当）

五島は、I巻では第10章「マス高等教育：1915-940」と第11章「標準的なアメリカの大学」、II巻では第1 章「GIビルとその後：1945-1955の高等教育」を担当した。戦間期はジュニア・カレッジやティーチャーズ・カレッジ、HBCU等のマス・セクターが拡大し、戦後は退役軍人をはじめとする成人を受け入ることで、高等教育の大衆化が進展した。同時に階層化も進み、リベラル・エデュケイションを核とするエリート・セクターの排他性が否応なしに露呈した。多様な社会階層を取り込むための包摂と排除の繰り返しは、まさに「標準的なアメリカの大学」の形成過程そのものである。いずれの章にも共通する「誰が大学に行くべきか」という問いは、今日の反DEI政策にまで連綿と続く、未解決の問いといえよう。「知的資格」「知的水準」を問う科学的調査は、アセスメントテストに振り回されている我が国の現状と重なり、アメリカ高等教育から何を学ぶべきかを再考させられる。

小林尚矢（東京大学・院生、II巻7章担当）

小林はII巻から訳業に参加し、第7章「現代の幕開け、1980-2000」を担当した。保守的な雰囲気が漂う当該期間の高等教育史を描出するうえで、著者は、1）研究の使命の復活、2）学生選抜競争、3）文化戦争という三つの柱を設けている。Ⅰ巻からの読者は、これらの

根底にそれぞれ「知識」「キャリア」「文化」という主題が潜んでいることに気づくだろう。その上で、著者の筆致に目を凝らしてみよう。1)、2）については財政問題をめぐる冷静かつ俯瞰的な記述が続く一方、3）の論じ方は概してシニカルだ。この点、すでにいくつかの書評で、説得的な研究大学に関する叙述に比べ、他種の機関や社会的マイノリティに対する著者の評価は一面的だ、と指摘されている事実は見逃せない。本章の主題が、今日の争点――イノベーションへの過度な期待、学費の高騰、政治的二極化――にも直結するものである以上、読者に求められているのは、著者と批判的に対話するような読みの姿勢だろう。

附記：本研究は、科研費 JP22K02695 の助成を受けた。

＜異動等に伴う会員情報更新の届出をお願い致します＞

ご所属や住所等にご変更のある会員は、事務局までお知らせください。ホームページ掲載の「事務局連絡先」フォーマット（Word ファイル、あるいは、PDF ファイル）などもご活用いただけます。現在、会員の皆様へのご案内やご連絡は、主にメールで配信しております。事務局へのご登録が旧アドレスのままの方や、メールアドレスの登録をされていない方は、ご連絡いただきますようご協力をお願い致します。

（参考）https://www.daigakushi.jp/home/jimu.html

（事務局長：蝶慎一）

編集後記

盛夏の候、ご健勝でお過ごしのこととお喜び申し上げます。「大学史研究通信」第 112 号が完成し、今号も大変充実した内容を掲載することができました。編集担当として心より感謝申し上げます。例年になく早い梅雨明けが発表され、すでに日中は猛暑日を記録している地点が多いかと存じます。先日からは、トカラ列島近海で発生している地震のニュースもございます。皆様、ご体調にはくれぐれもご自愛ください。

先月､2025 年度大学史研究会イベント及び臨時総会が東京大学教育学部(本郷キャンパス)において開催されました。当方も対面で参加致しましたが、非会員の方々を含め予想を超える多くの皆様にご参加いただくことができました。この場をお借りして重ねて御礼申し上げます。学生会員の方々にも多数お越しいただき、日頃から「大学史」をめぐるご研究の興味・関心の話題で盛り上がりました。当日は夜に懇親会が開催され、主催者側の一人として大変楽しい時間を過ごさせていただきました。

2025 年度第 48 回大学史研究セミナーは、日本大学文理学部（東京都世田谷区）で開催する予定です。首都圏や関東地方はもとより、全国各地からのアクセスが非常に良い場所での開催となります。是非多くの皆様のご参加をお待ちしております。ご必要に応じて航空券・鉄道、ご宿泊場所のご予約・お手配等、何卒よろしくお願い致します。

第 113 号以降では、今号に掲載しております「会員による訪問記」をはじめ、「図書紹介」などの記事を広く会員の皆様からご寄稿頂けるように、更なる紙面の充実にも努めて参ります。少しでもこの『大学史研究通信』が日々の教育・研究、諸活動のお役に立てるように引き続き、編集を行っていきたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

（編集担当、事務局長：蝶慎一）

「大学史研究通信」第 112 号の編集は、事務局長／運営委員・蝶 慎一（香川大学）が担当致しました。
連絡先：jimu-kyoku@daigakushi.jp

「大学史研究通信」第 113 号は、2025 年 10 月上旬頃の発行を予定しています。

大学史研究会
〈運営委員会代表〉
福留東土
〈事務局連絡先〉
運営委員会・事務局へのお問い合わせは、下記代表 E メールアドレスまでお願い致します
E-mail: jimu-kyoku@daigakushi.jp

運営委員（五十音順）
浅沼薫奈（大東文化大学）　塩崎辰朗（創価大学）
蝶慎一（香川大学）　戸村理（東北大学）
中村勝美（広島女学院大学）　原圭寛（昭和音楽大学）
福留東土（東京大学）

事務局員（五十音順）
山崎慎一（桜美林大学）　山本尚史（筑紫女学園大学）